



「やっほー！また来たよ、
神子姉ちゃん！」

昼下がり、神社に訪れた少年。
八重神子にとって取るに足らない
はずの存在に、しかし神子は
苦渋に満ちた表情で少年を見る。

「童よ、もう来るな、ときつ〜く
言っておいたはずじゃが？」

「またまた、神子姉ちゃんは
面白いなあ！」

少年はぼちん、と指を鳴らす。



「んぐっ！」

「。。。すぐに立場を
忘れるんだからさあ」

八重神子のお腹に淫紋が浮かぶ。
無邪気な童を装い、不意打ちで
つけられたツレのせいで、
神子は少年に逆らうことが
出来なくなっていた。

「ボクは別にここでもいいよ、
神子お姉ちゃん♡
どうする？」

「と、この。。。/っ♡」



「…ついてくるがよいっ！」

「はいはい♥今日はお部屋かな♥
人払いの結界、貼ってね♥」

「~~~~っ！」

苛立ちを何とか回にせず、
黙々と少年を案内する神子。

淫紋を起動されると、
正気が保てなくなってくる。
はやく人のいないところに
行かなければならない。

神子は必死だった。

は は

「まったく、好き放題射精しておって…」

むせ返るほどの性臭が立ち込める一室。
少年の"若さ"をぶつけられた
オマンコからは大量の精液が零れ、
幾度もの性交が行われたことを
証していた。

「あ〜♥神子姉ちゃんの肌♥
すべすべできもちい〜♥」

「やかましいわ。。。♡
ふう、疾く離れるがよい。。。♡」

ト
ロ
キ



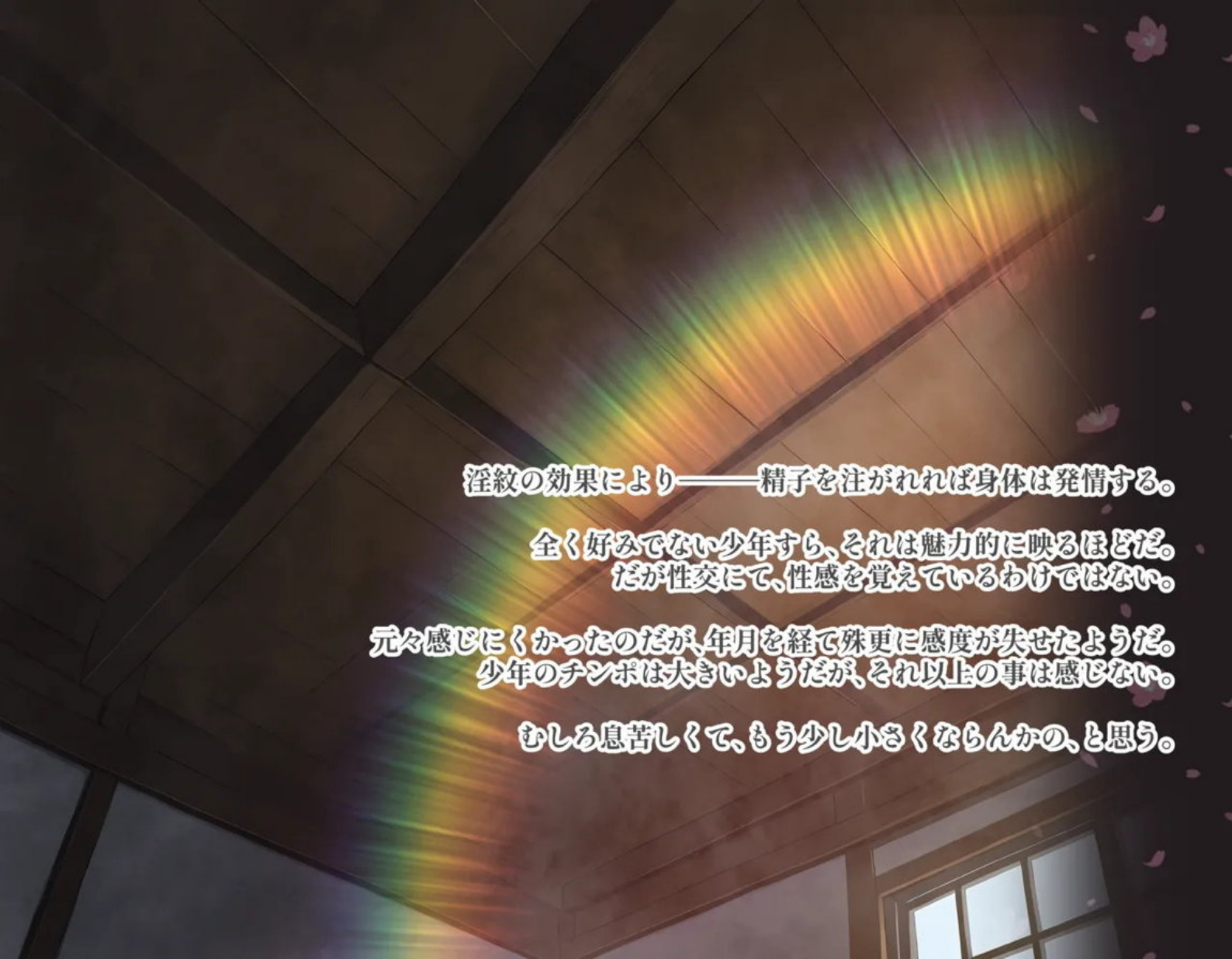
「う〜ん。。。でも神子姉ちゃん、
やっぱりオマンコ全然感じないね」

「ふん。妾がどれほど生きているのか、
童には想像もつくまいな。
とうに、そんな盛りは過ぎでおるのよ」

「ふ〜ん。
でも注いだときは感じてたよね」

「たわけが、
それは淫紋のせいじゃるが」

い
い
と



淫紋の効果により——精子を注がれば身体は発情する。

全く好みでない少年すら、それは魅力的に映るほどだ。
だが性交にて、性感を覚えているわけではない。

元々感じにくかったのだが、年月を経て殊更に感度が失せたようだ。
少年のチンポは大きいようだが、それ以上の事は感じない。

むしろ息苦しくて、もう少し小さくならんかの、と思う。



「でも、僕は神子姉ちゃんにも
感じてほしいな」

「こ、こら、そこはダメじゃと」

「ちょっとだけだから、ね？」

「ちよっとなんて何じゃ！
絶対嘘じゃろ！
や、やめっ、あっ♡」

ガ
ル
ン



じゅるるるるるる——っ♡

「ん、あ、あ♡
やめ、吸う、でないっ、ひっ♡」

少年が八重神子の乳首を咥え、
吸うと反応が変わっていく。



じゅるるっ♡れるれるお♡ちゅぱっ♡

「ん♡んう、お〜〜ッ♡♡♡お♡♡♡」

特段、乳首が性感帯であったわけではない。

しかしマンコよりは

有望であった乳首の感度が、

淫紋の発情によって倍々に引き上げられたのだ。

結果

時の彼方にメスを忘れたはずの八重神子が、

少年から乳首を咥えられて

嬌声と共に悶絶している。



「ん♥おっほ、ほお〜♥♥」

「えへへ、神子姉ちゃんのおっぱいおいし♥」

じゅるるっ!ぶちゅうっ♥れるれるっ♥♥

「やッ♥♥♥おっ♥♥♥おッ♥♥♥いひいッ♥♥♥」

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

「神子姉ちゃんのおっぱい好きだな♡
これからも僕が吸いたい♡
って言ったら吸わせてよ、いいよね?♡」

「い、いいわけあるかあ♡♡」

じゅぞぞっ! れろれろっ、ちゅばあっ!

「~~~~~ッ♡♡♡♡♡」



じゅるるるっ…少年が乳首を強く吸う。
淫紋によって高められた乳首は真っ赤に晴れ上がり、
痛々しいほどに勃起している。

「乳首はこんなに素直なのに、神子姉ちゃんは意地っ張りだね」

「おっ♡や、やめよ、そんなに強く吸っては♡
っほ♡んおうッ♡~~~~~ううんッ♡」





「素直になれないお姉ちゃんには、
お仕置きが必要だね♥」

じゅるるるる~~~~♥かぶ♥はぶ♥

「んっ♥ひおっ♥喘むな！吸うのもだめじゃ！」

「めっ。お仕置きだよ」



乳首を甘噛みされ、
八重神子の身体がびくびくと跳ねる。

「あ、おおぅぅ~~~~っ♡♡♡♡」

じゅるじゅるっ♡♡れるおっ♡♡
かぷかぷ♡ちゅっ♡♡

「だめ♡だめじゃから♡お♡あっ♡ひっ♡♡♡」



「神子姉ちゃんの乳首…
すごく熱く、固くなってきた♡
イキそうなんだよね?」

「だ、誰がイク、かぁ♡だんッ♡」

「一緒にイこ♡
神子姉ちゃん♡」

「こ、このっ、話を、聞けっ♡♡
うおおおおっ♡♡♡♡♡」

じゅるるるっ♡♡かぶ♡
れろお♡♡ちゅぱっ♡♡



「んんッ♥♥おッ♥♥おっ♥♥~~~~~っ♥♥」

(だ、だめじゃ♥何とか耐えっ♥♥くっ♥ううう♥♥)

必死に絶頂を堪える八重神子の表情。
少年はそれを見て、もう片方の乳首を指でつまみ――

くりくりくりくりくりっ♥♥♥♥♥♥♥♥



「おッ♡りょッ♡両方っは、反則♡
じゃろおつつっ♡♡♡♡♡♡♡」

必死に堪えていた官能が、
両乳首の愛撫で決壊する。
爆発的な官能が、背筋を通じて
脳髓を甘く痺れさせていき――

どぶん♡びゅくる♡びゅぶるるるっ♡♡ぶびゅっ♡♡
ぽびゅるるるるるるるっ♡♡♡♡♡♡♡

膣内に精液が、回内に母乳が、同時が流れ込む。

「んっ。。。んく。。。ぞく。。。♡」

少年は嬉しそうに、
喉を鳴らして母乳を飲み下してゆく。





「ひゅっ♡♡こ、この♡♡
か、勝手に、射精しておってえ…♡」

言葉と裏腹に、八重神子の声色は甘い。
理性は噴乳絶頂で薄れ、
注がれた精液に共鳴した淫紋が、
とくん♡とくん♡と甘い鼓動を
全身に刻ませる。

神子の視線は
快楽への期待に
染まりつつあった。

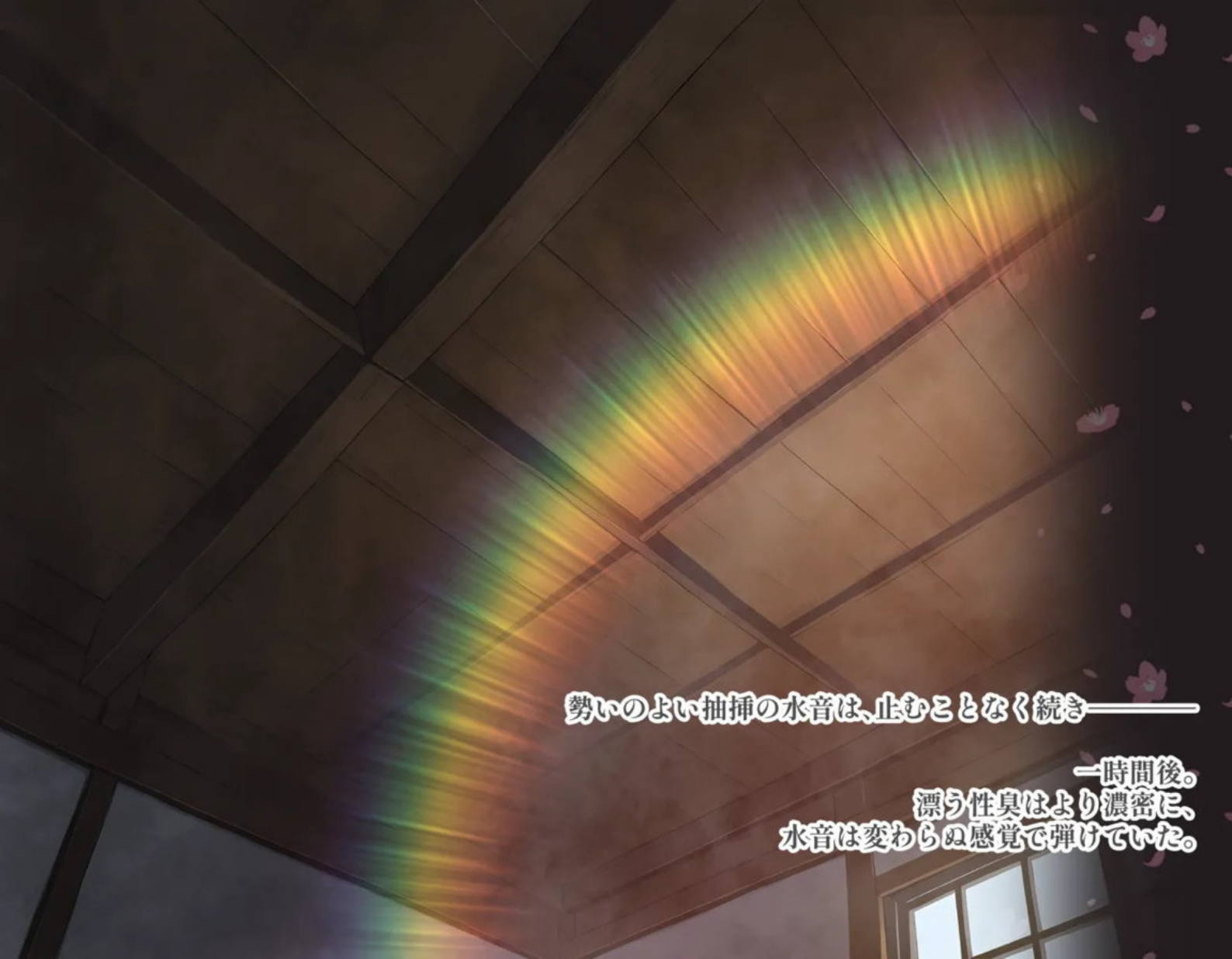


「神子ねえちゃん♡すきっ♡
じゅるるるっ♡かぶ♡♡」

「お♡こ、こらっ♡
もう射精したであろっ！/まだする気かっ」

「神子姉ちゃんになら、
いくらでも射精できるよ！！！」

「そ、そういうことではないッ♡
お、やめ、嘔むなっ、へえ♡♡」



勢いのよい抽挿の水音は、止むことなく続き――

一時間後。
漂う性臭はより濃密に、
水音は変わらぬ感覚で弾けていた。

「ほっ♡お♡らめじゃ♡♡乳首♡
またっ♡♡イ、グッ♡♡♡♡♡」

ぶびゅっ♡びゅるるっ♡♡どぶっ♡♡
びゅるるる〜っ♡かぷかぷ♡ちゅっ♡♡

「神子姉ちゃんの乳首、実においしいよ♡」

「だ、だめじゃってえ…♡♡も、おおんっ♡♡
イ、イクう♡♡あひっ♡♡ひううううっ♡♡」



(い、いかん♡

いったいいつまで続くっ!?♡♡♡♡

しゃ、射精のたびに考えがぼやけて♡♡♡♡

イ、イクたびに頭がおかしくなりそうじゃっ♡♡♡♡

あ、ありえぬっ♡

いいようにされておるっ♡♡

妾、が♡このような童、にい♡♡♡

いっ♡♡♡♡♡♡♡

うそじゃあっ♡♡♡♡♡♡♡

さ、さっきいったのに、ア♡♡♡

またイグラッ♡♡♡♡♡♡♡

ズン♡

ズン♡



ぽぶんっ♡びゅぐりゅりゅりゅう♡♡♡♡

「おっ♡ほっ♡んほおおッ♡♡♡♡

イ、イクラッ♡♡

お~~~~っ♡♡

お~~~~っ♡♡」

(あ、頭おかしくなるッ♡♡

狂ってしまうッ♡♡

た、耐えっ、耐えねば、

ならぬのにッ、イ♡♡)



二時間後



「ほおおおおおおっ♥♥♥まらでるう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥
おっばいびゅ〜びゅ〜でるうううううう♥♥♥♥」

「僕もまだまだ射精るよお！！うおおおおおおお！！！！」

「んひひひひひひひひひひッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

三時間後

「お~~~~っ♥♥♥おお~~~~っ♥♥♥
しぬうっ♥しんで、しまふううッ」

「大丈夫♥僕みたいな若造に
神子姉ちゃんが○せるわけないから♥♥
まだまだイカせてあげるね♥♥じゅううううっ♥♥♥♥♥」

「おっほおっ♥♥♥んほおお~~ツツ♥♥
おおんっ♥♥イグイグッ♥♥おう~~~~ツツ♥♥♥」

四時間後



「お〜っ♡♡お〜っ♡♡♡
んお〜〜っ♡♡あへっ、へええっ♡♡」

「ふう。。。/神子姉ちゃんのおっぱい、
出なくなってきたね。嘔めば出るかな？」

「oooooooooo♡♡でりゅ♡♡でしゅぎりゅ♡♡♡♡
も、もう。。。むりい。。。♡♡ひいっ♡」



ずぶ

ずぶ

「あへえ…♥♥あ、へひっ♥もっ、お~~~~っ♥♥
むりいっ~~~~っ♥♥まけじゃ♥♥♥♥♥♥
妾のまけでイイからああああ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「神子姉ちゃん、負けちゃうの？
いつも綺麗な神子姉ちゃんが負けるところ、見たくないな♥
ほら、もっと頑張ってよ♥こりこり♥じゅうううううッ♥♥♥♥」

「はおおおおお~~~~っ♥まらイグっ♥
イクうっ♥♥イき死ぬうう♥♥あへっええええ♥♥」

五時間後